リンドウ産地の礎を築いた
吉池貞藏氏を名誉市民に

市は、市民や市と特別に縁故の深い人で、市政の振興、社会福祉の向上、産業の発展、学術・文化やスポーツの興隆に貢献してその事績が卓絶で、市民が郷土の誇りとする人に対し、功績をたたえるために「八幡平市名誉市民」の称号を贈っています。

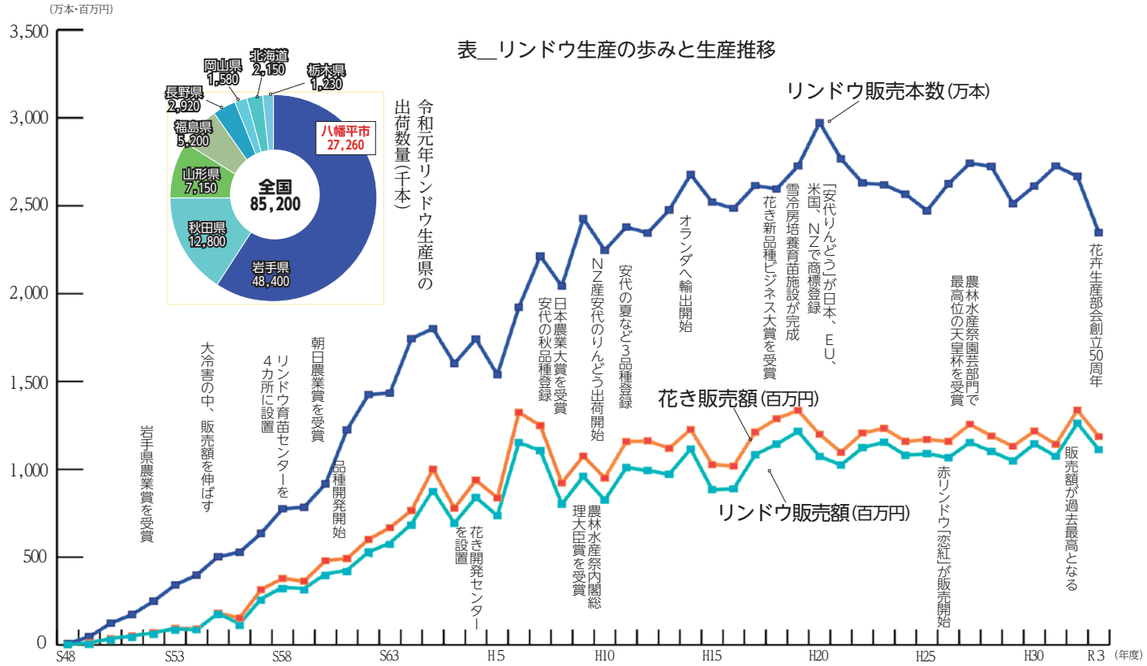
この度、市制後初の名誉市民となった吉池貞藏氏の功績やリンドウのこれからの100年産地を目指し、吉池氏を招いて行われた懇談会の模様などを紹介します。

安代町花き開発センター所長時代にリンドウほ場を確認する吉池氏

令和4年市議会第3回定例会で「名誉市民の決定に関し同意を求めることについて」の議案が可決され、吉池貞藏氏に名誉市民の称号を贈ることが決定しました。

吉池氏は、冷涼な気候により稲作に適さなかった旧安代町で、花き栽培を産業として定着させ、育種や栽培方法を確立させました。平成4年に開所した花き開発センターでは初代所長を務め、オリジナル品種の開発や海外輸出に取り組み、市(旧安代町)を国内生産の3割を占める日本一のリンドウ産地に育て上げました。

吉池氏は「名誉市民という称号をいただき、大変恐縮しています。生産者が中心となって栽培を続けてくれたおかげだと思っています」と関係者の取り組みに感謝しました。



表の出典：ＪＡ新いわて八幡平花卉生産部会創立50周年記念誌を一部加工

懇談 過去▶▶ ▶▶未来

会場＝安代総合支所

吉池氏への名誉市民称号の贈呈を記念し、9月27日、吉池氏を囲んで、(一社)安代リンドウ開発 髙村敏彦代表理事、JA新いわて八幡平花卉生産部会 齊藤正樹部会長、花き開発研究センター 津島佐智幸所長による懇談会を行いました。

懇談では、これまでの50年の歩みを振り返るとともに、100年産地を視野に入れた取り組みや今後について意見を交換しました。

――岩手県で初めて品種登録された「いわて」の完成までの経緯を教えてください。

吉池 リンドウは各地に自生し、土地の状態によりさまざまな姿をしている。その中から注目した花を交配していくが、交配数は無限大で、この交配した花の中で予想以上の花を咲かせたものがあり「いわて」と名付け販売した結果、盆や彼岸の需要期ではないが、高値で販売され、以後リンドウの生産はF1品種の声が強まるようになった。

当時の経緯などを語る吉池氏

――オリジナル品種の「安代の秋」などの開発エピソードを教えてください。

吉池 横山さん(花き開発研究センター前副所長)が熱心に育種に取り組んでくれた。

新しい取り組みを紹介する齊藤氏

――花卉生産部会が50周年を迎え、100年産地に向け取り組んでいますが、抱負をお願いします。

齊藤 吉池先生の考え方など参考にしながら進めていきたいと思う。生産者の高齢化に伴う人材不足など課題はあるが、海外にも目を向け、今後、周年栽培を目指し、冬場は海外で生産に取り組むなど、いろいろな可能性に挑戦していきたい。

吉池 北半球に比べて、南半球は需要が少ない気がする。地域の特性に合った生産が必要になってくると感じる。

齊藤 見たことのないリンドウをどのように売り込んでいくかが大切。世界で販売できるような市場の開拓・知名度の向上を目指して取り組んでいきたい。

今後の展開に意欲を見せる高村氏

高村 生産者が減っていく中で「安代りんどう」※というブランドを残す体制づくりが必要。生産者が一丸となり、取り組んでいくことが必要だと思う。現在はルワンダでの栽培も確立しつつあるので、継続して事業を展開していきたい。

吉池 生産量が昨年より落ちているようなので、しっかりPRしてほしい。

高村 全国的に花の生産が減っていく中で、現在の生産量を維持していくことが大切。時代の流れに合った生産スタイルを考え、100年産地を目指したい。

齊藤 生産者確保のため、部会では、「花育(はないく)」という取り組みに力を入れている。地元の小学生と交流することで、リンドウの魅力を伝えている。また、今年開校したハロウ校とも交流していくなど、魅力を伝える活動を続けていきたい。

――最後にアドバイスをお願いします。

吉池 課題はあるが、一つずつ階段を登るように解決していってほしい。全体を見ながら研究を続け、この地域に役立つものを作ってほしい。

(懇談終了)

※「安代りんどう」…八幡平市で開発されたオリジナル品種の総称で平成20年に商標登録

地域が一体となって目指すは100年産地

日本一の産地として

昭和46年、旧安代町の農業青年クラブがリンドウの栽培に取り組み半世紀以上が経ちました。吉池氏ら専門家の力を借りながら、生産量を増やし、60年には、当時日本一の生産地だった長野県を抜き、岩手県が日本一の生産地となりました。

さらなる高みを目指して

日本一となった後、お盆や彼岸などに咲く品種がなかったことから安代独自の品種開発が始まりました。現在では、切り花21品種、鉢物9品種と初夏から晩秋まで長期的に出荷が可能になりました。

次世代へつなげる

「安代りんどう」を次世代に残していくため周年栽培や販路拡大を目指し、ルワンダなど海外での生産にも力を入れています。また、リンドウの魅力を地元の子どもたちに知ってもらうための花育活動や新たなニーズに対応した品種の開発など、行政と生産者が一体なり取り組んでいきます。

2

1

5

4

3

6

1＿市花き研究開発センター職員から品種開発について説明を受け、リンドウについて理解を深める安代小、田山小の児童たち　2＿生産者の畑で収穫体験をした児童たちが満面の笑みで記念撮影　3＿リンドウ栽培がきっかけで交流が始まったルワンダ。現地で栽培を行っている会社が市を訪問　4＿「安代りんどう」の品質を維持するため生産者が出荷物を検査　5＿吉池氏や関係者がほ場を回り品質など確認　6「安代りんどう」の新品種として昨年初出荷となった八重咲リンドウ「あしろブーケ」

名誉市民を紹介 －功績を振り返る－

オペラ歌手

故　佐藤喜美子（きみこ）さん

松尾村名誉市民（平成７年４月５日）
八幡平市名誉市民（平成17年９月１日）

昭和５年２月２日、東京都生まれ。

東京芸術大学音楽部声楽科を卒業後、ウイーン国立音楽大学声楽科に留学。在籍中に歌劇「蝶々夫人」の主役でデビューして以来、オーストリアを中心にオペラ歌手として活躍する。その間、国際音楽ゼミナールや日墺（にちおう）文化協会などを設立し、日本とオーストリアの経済・文化交流に貢献され、ウイーン市から日本女性として初の功労金賞を授与された。

平成元年、松尾村制１００周年記念事業「八幡平国際音楽祭」に出演していただいたのが縁で、村の国際交流推進委員として、オーストリアへの中学生派遣事業などを通じ、国際交流に貢献された。

旧松尾村とオーストリアのアルテンマルクト町との友好都市締結（平成６年11月13日）の早期実現に尽力した。

平成８年２月14日逝去。

詩人

故　江間章子（しょうこ）さん

西根町名誉市民（平成７年11月２日）
八幡平市名誉市民（平成17年９月１日）

大正２年３月13日、新潟県生まれ。

少女時代を母の郷里、西根町平舘で過ごす（平舘小学校に６年生まで在籍）。「春への招待」「夏の思い出」「花の街」をはじめ、多くの素晴らしい作品を発表。現代詩人会会員、日本文芸家協会会員、日本音楽著作権協会評議員としても活躍され、少女小説集、翻訳詩集など多くの著書を残された。

旧平舘中学校校歌、西根第一中学校校歌、平舘小学校創立１００周年記念賛歌の作詞を手掛けたほか、西根町歌、西根音頭の選者として、郷土のために貢献された。

市（旧・西根町）では、江間さんの『詩の心』を後世に伝えようと、平成10年に少年少女の詩「江間章子賞」を創設し、毎年、県内の小、中学生から広く詩を募集し、優秀な作品を顕彰している。

平成17年３月12日逝去。

名誉市民の決定を祝って

八幡平市長　佐々木孝弘

名誉市民・吉池貞藏様におかれましては、この度の受章、誠におめでとうございます。謹んでお祝いを申し上げます。

吉池様は、安代町花き開発センター初代所長に就任した当時、安代町に移り住み、「寒い地域でも、よそでできないものを残したい」との信念に基づき、リンドウの優良品種・独自品種の開発に多くの力を注がれました。日本一のリンドウ産地を育て上げることに大きく貢献され、本市の産業の発展に寄与された功績に対し心から感謝申し上げます。

いずれも平成７年に決定された旧松尾村のオペラ歌手・佐藤喜美子さんと旧西根町の詩人・江間章子さんに続き、吉池様は３人目の名誉市民となります。

ここに名誉市民の皆様の貢献をたたえ、郷土の先達、市民の誇りとして心から敬意と謝意を表しますとともに、ご栄誉を末永く顕彰申し上げます。